

# 経営経済学の源流

岡 本 人 志

## I 序

経営経済学 (Betriebswirtschaftslehre) の教科書においては一般に、その学説史を叙述した章または節が設けられている。そこでは、19世紀は、全く無視されるか、せいぜい暗黒の時代として簡略な消極的論及がなされるにとどまっているのが通例である。

グーテンベルク (Gutenberg, E.) が1958年に公にした教科書『経営経済学入門』<sup>1)</sup>を見よう。1910年頃以前、商業学 (Handelswissenschaft, Handelswissenschaften) という名称が一般的であった。グーテンベルクは、17世紀末のフランス人サヴァリー (Savary, J.) の著作に続いて、18世紀のドイツにおいてマールペルガー (Marperger, P. J.), ルドヴィチ (Ludovici, C. G.), およびロイクス (Leuchs, J. M.) らによる「比較的高い水準に達した体系的な商業学の著作」<sup>2)</sup> が発表されたことを指摘した後、19世紀の状況について、次のように記している。「商業学に対する関心はもはや、ほとんど

1) Gutenberg, E.: Einführung in die Betriebswirtschaftslehre, Wiesbaden 1958. 吉田和夫, 杉原信男 (訳), 『経営経済学入門』, 千倉書房, 昭和34年。1970年代のなかばにおいても、「ドイツ語圏の大学における経営経済学は未だ決定的にグーテンベルクの経営経済学総論の影響を受けている」(Staehle, W. H.: Die Stellung des Menschen in neueren betriebswirtschaftlichen Theoriesystemen, ZfB., 45. Jg., 1975, S. 713.) といわれている。グーテンベルクの教科書は、初学者に対して大きな影響を与えうる位置にある。

2) Gutenberg, E.: a. a. O., S. 15.

存在しなかった。商業学は19世紀の間中、(若干の大胆な試みが存在したにもかかわらず)、簿記、計算、通貨、および度量衡の問題についての取るに足りない、そして不毛な論述の水準へと衰退した。17世紀および18世紀の商業学との結び付きは、19世紀においては完全といってよいほどに断ち切られた。マールペルガー、ルドヴィチ、およびロイクスの偉大な業績は葬り去られた。商業学の全く新しい時代は、商科大学(Handelshochschule)の設立とともに始まる<sup>3)</sup>と。ドイツ語圏における最初の商科大学は1898年に、ライプツヒに設立された。このときから、新たな発展が開始されたというのである。

グーテンベルクは、18世紀および1898年以降という前後の2つの輝かしい時代から分断された暗黒の時代という19世紀像を描いているのである。19世紀の文献についてその正確な内容も調べないままに、グーテンベルクにおけると同様の評価が幾度となく繰り返されている。ハイネン(Heinen, E.)の教科書『経営経済学入門』<sup>4)</sup>における学説史の叙述は19世紀を、「商業学の研究が意味を失った」<sup>5)</sup>時代として特徴づけている。そしてシェーファー(Schäfer, E.)の教科書『企業と企業経済学』<sup>6)</sup>における学説史の叙述は、19世紀の商業学を全く無視しているのである。現代経営経済学の代表的な教科書がこのような19世紀像を繰り返し説くとき、そのことが初学者をして19世紀の文献から遠ざける方向へと作用する要因となり、この時代の文献に関するいっそうの研究を抑制する方向へと作用する要因となることはいうまで

3) ebenda, S. 17.

4) Heinen, E.: Einführung in die Betriebswirtschaftslehre, Wiesbaden 1970. 谷武幸, 中善弘(訳), 『経営経済学入門』, 千倉書房, 1973年。

5) ebenda, S. 28.

6) Schäfer, E.: Die Unternehmung. Einführung in die Betriebswirtschaftslehre, 8. Aufl., Opladen 1974. 小島三郎, 小高泰雄(監訳), 『企業と企業経済学』, 慶応通信, 昭和44年。

なお、邦訳は原書第6版(1966年)からのものであり、本稿の叙述は原書第8版(1974年)に基づいている。

もないであろう。

経営経済学の多くの教科書に見出される19世紀像の淵源は、どこに存在するのであろうか。この疑問に対しては、経営経済学の教科書を離れ、学説史の専門文献へと目を転じることによって答えられなければならない。筆者は、「暗黒の19世紀」像の淵源を求めて、それがウェーバー（Weber, E.）によって1914年に定着させられたことを確認することができた。ウェーバーは19世紀を、18世紀および1898年以降という前後の2つの輝かしい時代から分断し、「実務的商業学への浅薄化」の時代として特徴づけた。そしてこれを、ビュッシュ（Büsch, J. G.）の著作に始まる大量の文献群、すなわち商品、通貨、および度量衡などに関する知識を提供せんとする大量の教科書群の存在をもって例証した。この大量の文献群は19世紀を特徴づけるものとされるのが通例であり、したがって、これを19世紀的商業学と呼ぶことにしたいと思う。19世紀的商業学という表現は、19世紀に公にされた文献を漠然とさすものとして用いられているのではなくて、19世紀を中心として公にされた、明確に限定された一定の文献群をさすものとして用いられている。

研究史のその後の展開を見ると、われわれは、19世紀についての暗い、否定的なイメージがウェーバーにより定着させられたと考えてよい。このイメージはやがて、1920年代に至り、ペンドルフ（Penndorf, B.）、ザイフェルト（Seyffert, R.）、およびドゥーゼムント（Dusemund, F. J.）により強力に支持され、「後退の時期」あるいは「商業学の衰退時代」という特徴づけのもとに継承されていったのである。

ところが、ウェーバーやザイフェルトらの所説を詳しく調べてみると、われわれは、「暗黒の19世紀」像を例証するものとされた19世紀的商業学の大量の文献群の存在とともに、これとは区別される別の潮流の存在が指摘されていることを知るのである。このようなものとして、ウェーバーは、18世紀のロイクスらの偉大な業績を継承するロレンツ（Lorenz, E. J. v.）らの

著作、および20世紀における発展の先駆者とみなすリンドヴルム(Lindwurm, A.) やエミングハウス (Emminghaus, A.) らの著作の存在を指摘し、ザイフェルトは、1920年頃に形成された経営経済学の先駆者とみなすリンドヴルムやエミングハウスらの著作の存在を指摘しているのである。そしてドゥーゼムントは、「全体」の立場や独特の「成果」の概念など、一般に20世紀の経営経済学の創見と考えられている多くの概念や思想の萌芽が遠く19世紀の文献の中に存在することを洞察しているのである。

結局、ウェーバーやザイフェルトらによる19世紀の捉え方の難点は、19世紀的商業学の大量の文献群に気を取られ、他の潮流の存在を知りながらも、19世紀を暗黒の時代として一括評価し、一括時代区分してしまった点にあるといえるのである。<sup>7)</sup>

近時の関連する研究史の動向は、ウェーバーやザイフェルトらによる19世紀の研究が再検討の余地を残していたことを明らかにしつつある。かれらの研究成果に対するライテラー (Leitherer, E.) およびマルシャイダー (Marschneider, D.) の批判が重要である。ウェーバーやザイフェルトらによって19世紀を特徴づけるものとされ、したがって「暗黒の19世紀」像を例証するものとされてきた19世紀的商業学の大量の文献群を、ライテラーは経営経済学の文献とは無縁なものときめつけ、そしてマルシャイダーはこれを、学説史の研究対象から完全に排除してしまっている。19世紀の文献のうちでかれらの関心をひくのは、ウェーバーが20世紀における発展の先駆者とみなした文献、ザイフェルトが1920年頃の経営経済学の先駆者とみなした文献、具体的にはリンドヴルムとエミングハウスの著作のみである。マルシャイダーは、

---

7) 「あたかもこの時期において重要なものが全く公にされなかったかのごとくに解されてはならない」(Nicklisch, H.: Grundfragen für die Betriebswirtschaft, Stuttgart 1928, S. 8. 木村喜一郎(訳), 『経営経済原理』, 文雅堂, 昭和5年。) というニックリッシュの言葉は、ウェーバーやザイフェルトらによる一括的な評価と時代区分の学説の欠陥をよく表現している。かれらの枠組みは、あまりにも大雑把すぎるのである。

リンドヴルムとエミングハウスの著作が現われた1860年代をもって学説史における大きな転換期と理解し、ここに現代経営経済学の起源を見ている。

「暗黒の19世紀」像にかわって登場するのは、「経営経済学の源流としての19世紀」像である。この捉え方は確かに、19世紀が実り豊かな時代であったことを見直させ、そして19世紀、その60年代と20世紀との連続という極めて啓発的な視点を提供している。しかしながら、19世紀的商業学の大量の文献群を無視している点において、ウェーバーやザイフェルトらと同様、否、むしろ逆の方向への行き過ぎであり、片手落ちであるといわざるをえないのである。

一般には暗黒の時代と考えられている19世紀も、実情は決して、この19世紀像を例証する単一の潮流のみから成る安定した時代ではなかった。1920年頃に形成された経営経済学と照応する断片を含むいくつかの著作がすでに19世紀において現われていた。そして「暗黒の19世紀」のまっただなかの60年代に現代経営経済学の源流を探る人がいる。19世紀には経営経済学の形成史にとって根元的な問題が伏在しているのであり、筆者は、19世紀が経営経済学の形成史の研究にとって欠くことができないほど重要な時期であると考えている。

本稿における私の主要な課題は、19世紀の捉え方をめぐって展開されてきた研究動向を鳥瞰し、従来の研究が到達している地点を確認することにある。そしてこの作業を踏まえて、19世紀において対立する諸潮流や諸要素を捉えるための枠組みを素描してみたいと思うのである。学説史上、19世紀もまた、いくつかの潮流が並存し、しかも対立する緊張に満ちた時代であった。

## II 「暗黒の19世紀」像の創造

特に簿記史の領域で大きな業績を残したペンドルフは、次のように述べている。「一芸に秀でんとする者は、その歴史を学べ。歴史の基礎なくしては、

あらゆる知識は不完全であり、現在の諸事象に対する判断は不確実かつ未熟である」<sup>8)</sup>と。しかしながら、経営経済学の学説史を専門的に取り扱った文献の数は多いとはいえない。

ヘラウアー (Hellauer, J.) が1910年の著書『世界商業学の体系』<sup>9)</sup>において描いた学説史から見ていこう。ヘラウアーは、14世紀頃のイタリア商業学の隆盛、17世紀末のフランス商業学の隆盛に論及した後、18世紀のドイツ商業学の隆盛に論及する。18世紀のドイツ商業学の代表者として、マールペルガーとルドヴィチがあげられている。続く18世紀末から19世紀前半におけるドイツの状況について、ヘラウアーは、次のように記している。「18世紀の末、ビュッシュが活躍した」<sup>10)</sup>「ドイツでは、商業学の文献の領域における最も活発な活動の時代がビュッシュとともに始まり、この時代は19世紀のなかばまで続く」<sup>11)</sup>と。ヘラウアーによると、この時代は、著者の数の多いことおよび科学性の欠如によって特徴づけられる。19世紀後半の状況については、次のように記されている。「全体的にみると、19世紀後半においては、科学的な商業学を形成することは放棄された」<sup>12)</sup>と。ヘラウアー自身の観点に立つと、19世紀は「商業学の汚名」<sup>13)</sup>の時代であった。ヘラウアーはこの汚名を返上すべく、特に科学性を配慮して1910年の著書『世界商業学の体系』を書いたのである。

次に、ウェーバーが1914年に公にした著書『商業経営学の文献史』<sup>14)</sup>を見よう。この著書において、ウェーバーは、学説史の次のような時代区分を掲げている。

8) Penndorf, B.: Geschichte der Buchhaltung in Deutschland, Leipzig 1913, S. III.

9) Hellauer, J.: System der Welthandelslehre, Berlin 1910.

10) ebenda, S. 18.

11) ebenda.

12) ebenda, S. 20.

13) ebenda.

14) Weber, E.: Literaturgeschichte der Handelsbetriebslehre, Tübingen 1914.

第1期 体系的研究の先駆者（17世紀まで）

第2期 官房学のもとにおける体系的研究（18世紀）

第3期 実務的商業学への浅薄化（19世紀）

第4期 新しい商業経営学の生成

本稿において問題となる第3期（19世紀）についてのウェーバーの叙述は、次の3つの部分から構成されている。

A. 浅薄化の原因

B. ビュッシュ以後の実務的商業学の生成

C. 19世紀中葉の若干の商業経営学

以下において、これら各部分を見ていこう。

浅薄化の原因を取り扱った箇所において、ウェーバーは、第2期（18世紀）におけるルドヴィチからロイクスまでの「新しい科学の完成を力強く目指した」<sup>15)</sup> 全発展の後に、19世紀において商業学の「奇妙な衰退」<sup>16)</sup> が生じたことを指摘し、この衰退に対する3つの原因をあげている。原因の第1は、商業学に対する商人の態度に、第2は、商業学校制度の改変に、第3は、官房学が国民経済学へと発展したことに求められている。

ビュッシュ以後の実務的商業学の生成を取り扱った箇所においては、ウェーバーは、このように表現された展開を、「最も主要なる文献に基づいて実証」<sup>17)</sup> している。この箇所は、18世紀末の「最も重要な商業学の著述家」<sup>18)</sup> であり「その著述活動を通じて当時の最も有名な人」<sup>19)</sup> であったビュッシュの業績を取り扱うことをもって始められている。ビュッシュの代表的な著書として、次のものが取り扱われている。

---

15) ebenda. S. 111.

16) ebenda.

17) ebenda, S. 116.

18) ebenda.

19) ebenda.

Büsch, J. G. : Theoretisch-praktische Darstellung der Handlung in ihren mannigfaltigen Geschäften, Hamburg 1792.

ビュッシュのこの著書『商業の理論と実践』の初版は2部から構成されていたが、後に4部に増補された。ウェーバーは、ビュッシュのこの著書の内容を簡単に紹介した後、次のように酷評する。「ビュッシュの著書は実際、『商業の最も主要なる業務に関する注意事項と省察事項の寄せ集め』にすぎない」<sup>20)</sup>、「全体としてみると、……商業学は、ビュッシュによって発展させられた部分は少なかったのである」<sup>21)</sup>と。

ウェーバーは続いて、「ビュッシュに源を発する」<sup>22)</sup>多数の著書、「特に教育目的のための多数の比較的小さな著書」<sup>23)</sup>すなわち19世紀的商業学の大量の文献群を取り扱う。たとえば、次のようなものが取り扱われている。

Brentano, L. : Lehrbuch der Handelswissenschaft, Fürth 1853.

Adler, A. : Leitfaden für den Unterricht in der Handelswissenschaft, Leipzig 1879.

Findeisen, C. F. : Grundriß der Handelswissenschaft, Leipzig 1879.

ブレンターノの著書の表題を『商業学教科書』、アドラーの著書の表題を『商業学教育入門』、フィンダイゼンの著書の表題を『商業学概説』と呼ぶことにする。これに類する多くの著書を列挙した後、ウェーバーはこれらを、次のように評している。「……われわれにとって特に問題となっている商業経営学 (Handelsbetriebslehre) の観点のもとにおいては、ほとんど総ての古き手引き書あるいは商業学が不十分であることは否定されない」<sup>24)</sup>と。こ

20) ebenda, S. 118.

21) ebenda, S. 119.

22) ebenda.

23) ebenda.

24) ebenda, S. 123.



の引用文中の「商業経営学の観点」は、「科学性の観点」を言い換えられることによって、その意味がいっそう明確になる。この観点こそがウェーバー自身の観点であったことはいうまでもないであろう<sup>25)</sup>。

19世紀中葉の若干の商業経営学を取り扱った箇所の冒頭において、ウェーバーは、「しかしながら、この時代においても、若干の希望の光が存在する」<sup>26)</sup>と述べている。ウェーバー自身の科学性の観点のふるいにかけて、希望の光として称揚されるのは、いかなる文献であろうか。ウェーバーはいうのである。「そのうちのあるものは、商業学の古典を思い出させる若干の著書であり、あるものは、新たなる輝きをもって蘇生した商業経営学の先駆者たる若干の著書である」<sup>27)</sup>と。この引用文中の「商業学の古典」とは、ウェーバー自身の時代区分にいう第2期(18世紀)に属する文献のことであり、具体的には特にロイクスの著書のことである。ロイクスに代表される18世紀の商業学の古典を継承する者が19世紀においても活躍していたのである。また、上記の引用文中の「新たなる輝きをもって蘇生した商業経営学」とは、最初

25) 経済学史の領域で、杉本栄一教授は、次のような型の学説史が存在することを指摘しておられる。この型は、「著者が唯一の正しい経済理論と考える理論の立場に立ち、過去の経済学史は、この唯一の真理に向って自己展開してきたものである、とみる型である。すなわち、この立場から過去の経済諸学説を照射してみると、この唯一の理論から遠いものもあれば、これに比較的近いものもあることが判るから、そこで、前者を比較的未発達な理論または夾雑物の多い理論とみなし、後者を比較的進歩した理論または純粋な理論と考え、諸学説を、未発達なものから発達したものへ、夾雑物の多いものから純粋なものへ、という順序に並べてみると、そこに、経済学に関する一種の合理論的な観念史が成立つわけである。この場合、基準としてとられる唯一の経済理論は、当然に、著者自身が現代経済学の精髓とみるところのものであろうから、このような『現代経済学』の自己発展史は、当然に近代の部をもち、そこに近代経済学史が成立つことは、いうまでもない」(杉本栄一、『近代経済学史』、岩波書店、1953年、2～3ページ。)と説明されている。

本節において見たように、ウェーバーの文献史はわれわれの学科目の学説史書として、このような性格を特徴的に示す代表例である。また後に見るように、ペンドルフ、ザイフェルト、およびドゥーゼムントの文献史も、この性格を顕著に示すものである。

26) Weber, E.: a. a. O., S. 123.

27) ebenda.

の商科大学が設立された1898年以降において、特に1910年代前半において登場した商業経営学あるいは私経済学 (Privatwirtschaftslehre) のことである。ウェーバーは19世紀の若干の文献を、この先駆者として称揚するのである。

上記の第1の潮流の代表者として、すなわち「一瞥しただけでロイクスの影響が明らかである」<sup>28)</sup> ものとして、次のような文献が取り扱われている。

Lorenz, E. J. v. : Allgemeine Handelslehre oder System des Handels, Leipzig 1847.

ロレンツのこの著書の表題を『一般商業学』と呼ぶことにする。

上記の第2の潮流の代表者として、次の文献が取り扱われている。

Lindwurm, A. : Grundzüge der Staats-und Privatwirthschaftslehre, Braunschweig 1866.

——: Die Handelsbetriebslehre und die Entwicklung des Welthandels, Stuttgart und Leipzig 1869.

Emminghaus, A. : Allgemeine Gewerkslehre, Berlin 1868.

Courcelle-Seneuil : Theorie und Praxis des Geschäftsbetriebs in Ackerbau, Handel und Gewerbe, Stuttgart 1868.

リンドヴルムの第1の著書の表題を『国家経済学および私経済学の原理』、かれの第2の著書の表題を『商業経営学』、エミングハウスの著書の表題を『一般工業学』、クールセルスヌイユの著書の表題を『事業経営の理論と実践』と呼ぶことにする。クールセルスヌイユのこの著書は、1854年にフランスで公にされ、そして1868年にエバーバッハ (Eberbach, G. A.) によりドイツ語に翻訳されたものである。ウェーバーは、これらの著書の内容を称揚しながらも、次のようにいうのである。「……1860年代の若干の積極的な試みは、その時代において特別のものであったというよりも、むしろ異常なものであったように思われる。それらは、顧慮されることなく、迅速に忘れ

28) ebenda, S. 124.

去られた」<sup>29)</sup>と。

以上において、19世紀の様相に関するウェーバーの叙述を見てきた。「学説史の研究は全く、ウェーバーの名著『商業経営学の文献史』の影響のもとにある」<sup>30)</sup>と評され、「『商業経営学の文献史』から手っ取り早く『経営経済学の歴史』が編まれた」<sup>31)</sup>とも評されていることから理解できるように、ウェーバー以降、学説史の研究へと赴くいかなる研究者もその出発点において、ウェーバーの研究成果を踏まえ、これに対していかなる態度をとるか、という決定をせまられることになった。

19世紀の様相に関するウェーバーの研究成果を要約しておこう。

- 1) かれは19世紀を、それ以前および以降から区別されるべき時代とみなし、そして「実務的商業学への浅薄化」の時代として特徴づけた。かれは19世紀に「闇」を見ている。
- 2) このような時代として一括的に評価した19世紀の文献を、かれは3つの潮流に大別した。第1は、19世紀的商業学の大量の文献群であり、第2は、18世紀における商業学の古典を継承する文献であり、第3は、20世紀における発展の先駆者であった。かれは第1の潮流をもって、19世紀を特徴づけるものとし、「暗黒の19世紀」像を例証するものとした。
- 3) かれは上記の3潮流を、1910年代前半の研究者たちの主要な関心テーマであり、当時の人々にとっては「現代」の立場でもあった「科学性」の観点から評価した。

### III 「暗黒の19世紀」像の継承

1914年以降に学説史を描こうとした人々は、その出発点においてすでにウ

---

29) ebenda, S. 115.

30) Löffelholz, J.: Geschichte der Betriebswirtschaft und Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart 1935, S. 18.

31) ebenda.

ウェーバーのすぐれた研究成果を見ることができた。私は、ウェーバー以降の研究史の動向を、かれの研究成果を継承したものと批判したものとに2分するのが、極めて妥当な整理の仕方であると思うのである。前者が本節において取り扱われ、後者は次節において取り扱われる。

ウェーバーの研究成果を継承する傾向の代表者は、1920年代のペンドルフ、ザイフェルト、およびドゥーゼムントである<sup>32)</sup>。かれらは、「後退の時期」あるいは「商業学の衰退時代」という暗い、否定的なイメージの伴う19世紀像を描く点において、ウェーバーが敷いた路線の上を進み、そして19世紀の文献を評価する場合の尺度として、1920年頃に形成された経営経済学の像を用いる点において、1910年代前半のウェーバーのテーゼを拡張する。

ペンドルフが1925年の論文「19世紀末までの商業学史」<sup>33)</sup>において描いたところから見ていこう。かれは、ルドヴィチからロイクスに至るまでの18世紀のドイツ商業学の古典に論及した後、19世紀の特徴的な状況を、次のように描いている。「……ウェーバーが実務的商業学への浅薄化と称する後退の時期が続く」<sup>34)</sup>と。この傾向を示す文献として、すでに前節において掲げた

32) 古い文献を取り扱った次のような著作に描かれた19世紀像も、この傾向に属する。

Schranz, A.: The german science of business-management, London 1929.

中村宣一朗、岡田昌也、吉田修、加藤恭彦 (訳), 『ドイツ経営経済学』, 千倉書房, 昭和46年。

Schwantag, K.: Betriebswirtschaftslehre. Geschichte, HdS., Bd. 2, Stuttgart/Tübingen/Göttingen 1959.

Schenk, H.-O.: Geschichte und Ordnungstheorie der Handelsfunktionen, Berlin 1970.

Jehle, E.: Über Fortschritt und Fortschrittskriterien in betriebswirtschaftlichen Theorien, Stuttgart 1973.

最近、フントは総括的に、「……歴史記述は一致してそして適切にも、『商業学の浅薄化』について語る」(Hundt, S.: Zur Theoriegeschichte der Betriebswirtschaftslehre, Köln 1977, S. 39.)と述べている。

33) Penndorf, B.: Die geschichtliche Entwicklung der Handelswissenschaften bis zum Ende des 19. Jahrhunderts, Festgabe für Robert Stern, Berlin/Leipzig/Wien 1925.

34) ebenda, S. 14.

ビュッシュやブレンターノなどの著書，すなわち19世紀的商業学の文献群が取り扱われている。

ウェーバーにより分類された19世紀の文献の3潮流のうち，20世紀における発展の先駆者とみなされた文献については，ペンドルフは，次のように述べている。「……経営経済学の先駆者と称しうる若干の著書が存在する」<sup>35)</sup>と。このような文献として，すでに前節において掲げたリンドヴルム，エミングハウス，およびクールセルスヌイユの著書が取り扱われている。これら3人のうち，エミングハウスは，「かれはすでに経営経済学の意味を理解していた」<sup>36)</sup>と称揚されている。

次に，ザイフェルトが1926年に『経営経済辞典』の1つの項目として発表した「経営経済学，その歴史」<sup>37)</sup>を見よう。そこにおいて，ザイフェルトは，学説史の次のような時代区分を掲げている。

第1期 早期，取引技術および計算技術の指導書の時代（1675年まで）

第2期 体系的商業学の時代（1675年—1804年）

第3期 商業学の衰退時代（19世紀）

第4期 叙述的商業技術論の建設時代（1898年—1911年）

第5期 理論的経営経済学への体系化と拡大の時代（1911年以降）

第6期 理論的基礎を有する実践的経営経済学の時代（1920年以降）

本稿において問題となる第3期（19世紀）についてのザイフェルトの叙述は

---

35) ebenda, S. 15.

36) ebenda, S. 18.

37) Seyffert, R.: Betriebswirtschaftslehre. ihre Geschichte, HdB., Stuttgart 1926. 岡田昌也（訳），「経営経済学，その歴史」（一），（二），甲南経営研究，第19巻 第3号，昭和53年，同 第4号，昭和54年。

これは後に，次の著書に収められ，現在，第6版まで版を重ねている。

Seyffert, R.: Über Begriff, Aufgaben und Entwicklung der Betriebswirtschaftslehre, 6. Aufl., Stuttgart 1971.

本稿の叙述様式においては，辞典の1つの項目として書かれた1926年のものが好都合であり，これを用いている。以下，Geschichte と略称する。

商業学衰退の原因を述べることをもって始められ、続いて19世紀的商業学の性格が論じられ、リンドヴルムらの著書を称揚することをもって終わられている。以下において、これらを見ていこう。

商業学衰退の原因については、ザイフェルトがウェーバーと同様の原因を列挙していることのみを指摘しておこう。ザイフェルトは続いて、19世紀を特徴づけるものとするビュッシュ以後の19世紀的商業学に論及する。「輪郭のはっきりしない、統一性のない商業学への内容的転換に対して、ビュッシュの影響は決定的であった」<sup>38)</sup>、「教育目的のために、商業学の多数の教科書が書かれた。これらは、一部分は改訂され、今日にまで至っている。これらには、科学としての意義は、わずかの例外を除いては与えられない。経営経済学への発展という観点から見ると、それらはむしろ、商業学の古典からの著しい後退である」<sup>39)</sup>と。

1860年代の卓越せる業績、すなわちリンドヴルムの著書『商業経営学』、エミングハウスの著書『一般工業学』、およびクールセルスヌイユの著書『事業経営の理論と実践』は、なるほど称揚されてはいるが、しかしながら、この時代における「例外」として把握されているにすぎない。ザイフェルトは、次のように述べている。「若干の重要な例外、特にリンドヴルム、エミングハウス、およびクールセルスヌイユの著書は、全く影響を与えないままであった。リンドヴルムの非常に鋭く批判的な頭脳による抗議、エミングハウスの徹頭徹尾独創的で深奥な工業経営学、新しい構想と内容をもたらしたクールセルスヌイユの明解な『事業経営の理論と実践』、これらが顧みられていたならば、われわれは今日、著しく先へ進んでいたであろう」<sup>40)</sup>と。ザイフェルトは、1860年代の卓越せる業績と20世紀の経営経済学との類似性に気付きながらも、両者の連なりを否定しているのである。

38) Seyffert, R.: Geschichte, S. 1212.

39) ebenda.

40) ebenda, S. 1213.

ここにおいて、ザイフェルトが想定した経営経済学の像を明確にしておきたいと思う。かれによると、1920年頃に新しく形成された経営経済学の代表者は、ニックリッシュ (Nicklisch, H.) とシュマーレンバッハ (Schmalenbach, E.) である。ザイフェルトは、ニックリッシュ経営経済学の特質を「企業者ではなくて、経営が研究と教育の中心点に立たなければならない」<sup>41)</sup> という点に見出し、シュマーレンバッハ経営経済学の特質を「最高の収益性」ではなくて「共同経済的経済性の意味における経済原則」<sup>42)</sup> を中心に置くという点に見出す。2人の経営経済学者のこの態度決定がもつ意味を、ザイフェルトは、次のように述べるのである。「このことは、2世紀半にわたって育成されてきた科学の伝統、すなわち商人にとって役立つ経済方法を認識せんとする学説を樹てるという伝統からの究極的な転換を意味する」<sup>43)</sup>と。

第3に、ドゥーゼムントが1929年に公にした著書『経営経済学における利益概念の発展』<sup>44)</sup>を見よう。かれは、「この研究の構成の基礎となっているのは、経営経済学の史的発展に関するザイフェルトの時代区分である」<sup>45)</sup>、「この時代区分において与えられている個々の時期の特徴は、利益概念の史的発展にもまた明確に現われている」<sup>46)</sup>と述べて、利益概念の歴史について、次のような時代区分を掲げる。

第1期 早期における利益観

第2期 サヴァリー (1675年) からロイクス (1804年) までの利益概念の  
深化

第3期 「商業学の衰退時代」(19世紀)における利益概念の発展休止

---

41) ebenda, S. 1217.

42) ebenda, S. 1218.

43) ebenda.

44) Dusemund, F. J.: Der betriebswirtschaftliche Gewinnbegriff in seiner historischen Entwicklung, Stuttgart 1929.

45) ebenda, S. 3.

46) ebenda, S. 4.

第4期 「叙述的商業技術論の建設時代」における利益概念

第5期 「理論的経営経済学への体系化と拡大の時代」における利益概念  
の精緻化

本稿において問題となる第3期（19世紀）における利益概念についてのドゥーゼムントの叙述は、次の4つの部分から構成されている。

1, 商業学の衰退とその原因

2, ビュッシュ以後の利益概念における国民経済学的観点の侵透, および  
ロイクスの影響を受けた19世紀前半の若干の商業学における利益概念

3, 特に意識的に商業学的な19世紀後半のリンドヴルム, エミングハウス,  
およびクールセルスヌイユの著書における利益概念

4, 総括

以下において、これら各部分を見ていこう。

商業学衰退の原因については、ドゥーゼムントがウェーバーやザイフェルトと同様の原因を列举していることのみを指摘しておこう。ドゥーゼムントは続いて、19世紀前半における利益概念を吟味する。そして、次のようにいう。「『商業学の衰退時代』の前半においては、利益概念の深化について語ることはできない」<sup>47)</sup>、「衰退時代の商業学の文献の基本的立場はいずれにせよ、以前の時代のそれと同じである。一般に、商業の目的、第1の目標が商人にとって可能な限り高い利益であるということから出発するのである」<sup>48)</sup>と。具体的には、ドゥーゼムントは、ビュッシュの著書『商業の理論と実践』の中に、「利益概念の叙述における顕著なる浅薄化の始まり」<sup>49)</sup>を見出している。また、「ロイクスに源を発する商業学」<sup>50)</sup>の代表者であるロレンツの著書『一般商業学』における利益概念を吟味している。

47) ebenda, S. 85.

48) ebenda, S. 76.

49) ebenda, S. 76-77.

50) ebenda, S. 81.



19世紀後半の文献について、ドゥーゼムントは、「衰退時代における従来の著書の枠を破る若干の出版物」<sup>51)</sup>が存在することを指摘する。このようなものとして、リンドヴルムの著書『商業経営学』、エミングハウスの著書『一般工業学』、クールセルスヌイユの著書『事業経営の理論と実践』の他に、ベーメルト (Böhmert, V.) の次の著書が取り扱われている。

Böhmert, V. : Die Gewinnbetheiligung. Untersuchungen über Arbeit-slohn und Unternehmergewinn, Leipzig 1878.

ベーメルトのこの著書の表題を『利益参加』と呼ぶことにする。

ドゥーゼムントは、リンドヴルムの利益概念を吟味し、そこに「全体の奉仕における思考」<sup>52)</sup>を見出す。これが20世紀のシェーアの学説の先駆的なものであることはいうまでもないであろう。ドゥーゼムントはまた、「工業労働」についてのエミングハウスの所説に注目し、次のようにいう。「われわれのテーマの枠内において、われわれにとって本質的と思われる若干の点のみを取り出しておきたい。工業労働と題する章において、エミングハウスは特に、共働者に対する人間的配慮の重要性を強調している」<sup>53)</sup>と。クールセルスヌイユの利益概念を取り扱った後、ドゥーゼムントは、「利益概念に関して論及するに値する論述を、われわれは、利益概念に関するベーメルトの研究の中に見出す」<sup>54)</sup>と述べて、ベーメルトの上記の著書に登場している成果と給付の概念を紹介する。そして、次のようにいうのである。「ベーメルトは、労働者に対する賃金と俸給を原価の構成部分とはみなさず、成果から補償されるべき給付とみなしている。かれの思考を後に、ディートリッヒ (Dietrich, R.) およびニックリッシュが継承する」<sup>55)</sup>と。

51) ebenda, S. 85.

52) ebenda, S. 92.

53) ebenda, S. 94.

54) ebenda, S. 100.

55) ebenda, S. 101.

最後に、ドゥーゼムントが19世紀の文献に現われた利益概念についておこなった総括の一部を引用しておこう。「サヴァリー以来一般的であった利益問題に対する態度は、衰退時代においてもまた支配的である。人は圧倒的に商人と企業者が自己の企業活動から最高可能な利益を獲得しうる手段を提示することを試みているのである。『商人にとって役立つ経済方法』を提示するこの傾向に対立して、リンドヴルムとベーメルトはすでに、全体の意味における思考を多分に強調し、商人の営利性向をこれと並置するか、下位にさえ置いた。これにより、何世紀にもわたって支配的であった利益性向への志向からの方向の転換がゆっくりと始まる。それは、『叙述的商業技術論の建設時代』においては未だ緩慢であるが、『理論的経営経済学への体系化と拡大の時代』の開始でもって完成する」<sup>56)</sup>。

#### IV 「暗黒の19世紀」像批判と新しい19世紀像の創造

本節においては、ウェーバーの研究成果を批判したレップェルホルツ(Löffelholz, J.), ライテラー, およびマルシャイダーの学説史が取り扱われる。19世紀に関するこれらの人々の所説は、ウェーバー以来の「暗黒の19世紀」像を批判したという点において共通するものを有している。しかしながら、これらの人々によって描かれた19世紀像は一様ではない。

レップェルホルツが1935年に公にした著書『経営経済および経営経済学の歴史』から見ていこう<sup>57)</sup>。この著書において、レップェルホルツは、「経営経済学の歴史を、経営経済の歴史との関連において叙述する」<sup>58)</sup>ことを試みている。本稿において問題となる19世紀の状況について、レップェルホルツ

56) ebenda, S. 103.

57) レップェルホルツによる学説史研究の影響は、次のものに、断片的ではあるが見出される。

Otto, H.-G.: Johann Friedrich Schär und die moderne deutschsprachige Betriebswirtschaftslehre, Basel 1957, S. 6.

58) Löffelholz, J.: a. a. O., S. XII.

は、次のように記している。「企業の発展は、経営経済学の発展と手を携えて進む。この理由から、経済飛躍の時代に『経営経済学の浅薄化および衰退の時代』を見ることは……『奇妙』であるのみならず、誤りでもある。近代的経営が最大の発展を経験し、発展の速度が巨大なまでに上昇したあの時代に、衰退時代が想定されるとき、それはまさに、怪奇な印象を与えずにはおかない。工業経営における機械の導入は当時、経営を新しい経済問題の途方もない山の前に置くことになった完全に新しい生産技術的基礎を創造した。19世紀においては、これと並んで、近代的な信用・支払い流通の驚くべきメカニズムを生み出した近代的大銀行の非常に複雑な有機体が生じた。今日の形態においては古代が知らなかった近代的取引所も全く、19世紀の産物である。鉄道と蒸気船の発明と普及は、何と大きな流通経済的および経営経済的变化をもたらしたことか。この技術革新が新しい経済問題の途方もない山、経営にとっては原価問題をもたらしたことは否定されえないのである」<sup>59)</sup>と。レップェルホルツは、ウェーバーやザイフェルトらによる19世紀像を批判し、これとは異なる新しい19世紀像を描こうとしているのである。

工業経営を対象とする19世紀の文献および銀行経営を対象とする19世紀の文献などが、この時代の経営経済の状況との関連において取り扱われることになるはずである。ところが、レップェルホルツは既述した著書において、「本書は、『資本主義以前の経済時代』における経営経済学の体系を取り扱い、そしてわれわれの科学の最初の2つの大きな時代、すなわちルネッサンスと重商主義の時代における近代的な経営経済学の諸概念と諸問題の生成と発展を取り扱う」<sup>60)</sup>といい、次のような内容に、叙述を限定しているのである。

#### 第1部 概念および方法論の基礎

#### 第2部 「資本主義以前」の経済体制における経営とその問題

<sup>59)</sup> ebenda, S. 16.

<sup>60)</sup> ebenda, S. XIII.

### 第3部 早期自由主義の経営経済学

#### 第1章 ルネッサンスの時代における経営と経営経済学

#### 第2章 重商主義の経営経済

ただし、レップェルホルツは、「19世紀と現代とを、続編において取り扱うという意図がある」<sup>61)</sup>と述べている。

レップェルホルツは1960年、「経営経済学の発展」<sup>62)</sup>を書いている。19世紀の状況はここにおいて説明されている。そこにおけるレップェルホルツの所説は、かれが1935年の著書『経営経済および経営経済学の歴史』において目指した方向に沿った叙述とともに、これとは相容れない叙述、挫折とも解される叙述を含んでいる。

まず、1935年に目指した方向に沿って、1960年のレップェルホルツの所説を取り扱いたいと思う。かれは、19世紀を「工業経営の生成と発展」<sup>63)</sup>の輝かしい時代として特徴づけ、次のようにいう。「(重商主義の)製造業……は、蒸気機関や機械による織機などの発明の後、工場制度によって迅速に駆逐された。当然のことながら、経営問題の前面には、生産の技術的な問題が立っている。しかしながら、これら総ての技術的な問題はまた、経営経済的な問題を提出する。そしてこの解決は、多くの技術的な進歩の前提となる」<sup>64)</sup>と。工業経営の生成および発展に関連づけられて、第1に、オットー (Otto) による「減価償却による価値減少の把握」<sup>65)</sup> (1850年)、第2に、「原価計算の発展」<sup>66)</sup>、すなわちフレダースドルフ (Fredersdorff, L. F.) による「間接費の特質の認識」<sup>67)</sup> (1870年)、バレヴスキー (Ballewski, A.) による「間接

61) ebenda.

62) Löffelholz, J.: Betriebswirtschaftliches Repetitorium, Die Entwicklung der Betriebswirtschaftslehre, ZfB., 30. Jg., 1960.

63) ebenda, S. 6-7.

64) ebenda, S. 7.

65) ebenda.

66) ebenda.

67) ebenda.

費の部門別集計」<sup>68)</sup>の提唱(1877年), メッサーシュミット(Messerschmidt, A.)による「原価計算に対する低下する操業度の影響」<sup>69)</sup>の認識(19世紀末)第3に, エミングハウスによる「最初の工業経営学」<sup>70)</sup>の体系化(1868年)が説明されている。

レップェルホルツによると, 19世紀は, 「信用・資本流通の大いなる活発化」<sup>71)</sup>によっても特徴づけられる。これとの関連において, 銀行経営を取り扱ったヒュープナー(Hübner, O.)の次の著書の存在が説明されている。

Hübner, O.: Die Banken, Leipzig 1853/54.

ヒュープナーのこの著書の表題を『銀行論』と呼ぶことにする。

既述したように, 1960年のレップェルホルツの所説には, 1935年にかれが目指したところとは相容れない叙述が含まれている。かれは明確に, 次のように述べているのである。「19世紀の本来の経営経済学的文献は基本的に, 経営と商業の知識を提供する, 学校教育と実務のための無数の教科書に尽きる」<sup>72)</sup>と。ウェーバーやザイフェルトらの叙述様式と変わるところはないのである。

最後に, レップェルホルツが1960年において示した学説史の時代区分を掲げておこう。

## I 今世紀への転換期以前の経営経済学の歴史

### 1, 古代と中世

### 2, 早期資本主義と高度資本主義の時代

68) ebenda.

69) ebenda.

70) ebenda.

エミングハウスの業績を「経済部門論」としての工業経営学として評価するものとして, 次のような著書がある。

Bellinger, B.: Geschichte der Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart 1967, S. 47-48. 高橋俊夫(訳), 『経営経済学小史』, ミネルヴァ書房, 1971年。

71) Löffelholz, J.: a. a. O., S. 8.

72) ebenda, S. 9.

## Ⅱ 今世紀への転換期以降の経営経済学の歴史

この時代区分において、19世紀は、ルネッサンスや重商主義の時代とともにⅠに属せしめられ、Ⅱから分断されているのである<sup>73)</sup>。

次に、ライテラーが1961年に公にした著書『商業経済および販売経済の文献史』<sup>74)</sup>を見よう。この著書において、ライテラーは、レップェルホルツの学説史の叙述方法を批判している。ライテラーは、レップェルホルツの方法、すなわち経営経済の歴史と関連づけて経営経済学の歴史を叙述するという方法を、『『混合せる』叙述方法』<sup>75)</sup>と非難する。そしてライテラー自身は研究の対象を、「もっぱら文献的源泉、とりわけ出版された著書」<sup>76)</sup>に限定する。その根拠は、次のように説明されている。「文献が常に一種の独自の生活を営むこと、独自の法則を展開することは、見落とされてはならない。…文献は、独自の尺度をもつ独自の世界を創造することも可能である」<sup>77)</sup>と。

ライテラーは、スコラ哲学における商業論、宗教改革の時代における商業論、14世紀から16世紀の文献、17世紀と18世紀の商業学の古典を取り扱った後、19世紀のドイツの文献を取り扱う。ライテラーがそこにおいて問題にしているのは、ウェーバーにより分類された19世紀の文献の3潮流のうち、ビュッシュ以降の19世紀的商業学の大量の文献群と20世紀における発展の先駆者とみなされた若干の文献である。

ビュッシュ以降の19世紀的商業学の性格を、ライテラーは、次のように規定する。「いわゆる商業学の最大の部分を構成するのは、商人を志す若者のための教科書であり、商業学校での授業のためのものであり、特に独学のた

73) レップェルホルツの時代区分とほぼ同様のものが、すでに示したベリンガーの著書にも見出される。

54) Leitherer, E.: Geschichte der handels- und absatzwirtschaftlichen Literatur, Köln und Opladen 1961.

75) ebenda, S. 11.

76) ebenda.

77) ebenda.

めのものでもある。これらの著書は、『教科書』あるいは『概説』という表題を理由もなしに付けられているのではない<sup>78)</sup>、「商業学の文献は、科学を創造せんとするものではなくて、商人を志す若者に実務の知識を提供せんとするものである。この観点から見るとき、これらの文献は初めて、考察者に対して実在の姿をとって現われる。さもなくば、これらの文献は、『奇妙な衰退』（ウェーバー）として現われなければならない。……『衰退時代』という名称もまた用心深く用いられるべきである。商業学の文献の著者は、商業の理論を与えんとしているのではないのである<sup>79)</sup>」と。そしてライターは、ビュッシュ以降の19世紀的商業学の大量の文献群が「元来、経営経済学の文献に属するものではない<sup>80)</sup>」と考える。ここから、19世紀的商業学を学説史の研究対象から排除するという考え方が生まれてくる。後に見るマルシャイダーの考え方がそれである。19世紀的商業学の大量の文献群は、ウェーバー以来「暗黒の19世紀」像を例証するものとされてきた。これが研究対象から排除されるとき、「暗黒の19世紀」像もまた消え去ることになる。

他方、ウェーバーが20世紀における発展の先駆者とみなした1860年代の若干の文献、すなわちリンドブルムの著書『国家経済学および私経済学の原理』エミングハウスの著書『一般工業学』、およびクールセル・スヌイユの著書『事業経営の理論と実践』に対して、ライターは、次のような評価を与えている。「これら3つの著書は、理論的経営経済学の先駆者であり、いわゆる19世紀的商業学には属さない<sup>81)</sup>」と。

ライターは1963年、「経営経済学史における時代区分の問題<sup>82)</sup>」と題する論文を発表する。そこにおけるライターの叙述は、次のような2つの大き

78) ebenda, S. 76.

79) ebenda, S. 77.

80) ebenda, S. 76.

81) ebenda, S. 75.

82) Leitherer, E.: Probleme einer Dogmengeschichte der Betriebswirtschaftslehre unter besonderer Berücksichtigung der Periodisierungen, BFuP., 15. Jg., 1963.

な部分に分けられている。

## I 19世紀までの経営経済学の時代区分

- 1, 商事的な計算と簿記の歴史
- 2, 14世紀以降の商事的な手記の歴史
- 3, 17世紀以降19世紀初頭までの商業学の歴史

## II 現代経営経済学の諸潮流の学説史の問題と素材

このうちのIIにおいて、ライターは、既述したリンドヴルムとエミングハウスの著書に論及して、次のように評している。「われわれがドイツの文献を見ると、……本来の経営経済学の文献として問題になるのは、この2つの著書のみである」<sup>83)</sup>と。そして特にエミングハウスの著書を、「現代経営経済学のたいていの領域を先取りしている」<sup>84)</sup>と称揚している。

第3に、マルシャイダーが1967年に公にした著書『1868年から1914年までのドイツ販売論の認識』<sup>85)</sup>を見よう。この著書には、「同時に、経営経済学の文献史および発展史の研究に対する貢献」という副題が付されている。われわれは、この副題に示された内容に焦点を合わせつつ、マルシャイダーの所説を見ることにしたいと思うのである。

マルシャイダーの上記の著書に寄せた序文において、シュヌーテンハウス(Schnutenhaus, O. R.)は、次のように述べている。「経営経済学の歴史において、19世紀がたいてい衰退時代として特徴づけられるとき、マルシャイダーの研究は……特に興味深く、そして啓発的である」<sup>86)</sup>と。すでに見たように、19世紀は、「実務的商業学への浅薄化」の時代(ウェーバー)、「後退の時期」(ペンドルフ)、「商業学の衰退時代」(ザイフェルト, ドゥーゼムン

83) ebenda, S. 574.

84) ebenda.

85) Marscheider, D.: Die Erkenntnis auf dem Gebiet des Vertriebes in der deutschsprachigen Literatur von 1868 bis 1914, Berlin 1967.

86) ebenda, S. 5.



ト)として特徴づけられてきた。マルシャイダーは、このような特徴づけをおこなうことを拒否する。その根拠として、2点が示されている。

第1の根拠は、「このような一括評価および一括時代区分が、卓越せる個別的な業績の研究を抑制する危険を含んでいる」<sup>87)</sup>点に求められている。「学説史的に未だ十分には研究されていない19世紀の専門文献」<sup>88)</sup>のうち、マルシャイダーは、少なくともエミングハウスの1868年の著書『一般工業学』とリンドヴルムの1869年の著書『商業経営学』が「忘却から救い出されるべきである」<sup>89)</sup>ことを主張する。しかも、マルシャイダーはこの2つの文献を、「この時代の真の認識状況を代表している」<sup>90)</sup>ものとして取り扱うのである。これに対して、ウェーバー以来「暗黒の19世紀」像を例証するものとされてきた19世紀的商業学の大量の文献群は、「……文献研究の対象として全く不毛である」<sup>91)</sup>とされて、学説史の研究対象から排除されてしまう。

第2の根拠は、次のように説明されている。「総ての時代区分の試みは、歴史的研究の間に合わせであるにすぎない。それはなるほど、1つの時代の量的に最も多い特性を把えることは可能である。しかしながら、精神的な諸潮流の並存の多様性全体を把えることは不可能である。総ての期間は、過ぎ去った発展期間に属するものを未だ含んでおり、そして続く発展期間に属するものをすでに含んでいる。突然の転換はまれであり、境界の確定できないような移行が多い」<sup>92)</sup>と。ウェーバーが解明したように、19世紀において、18世紀における商業学の古典を継承する文献が未だ存在していたし、20世紀における発展の先駆者とみなされる文献がすでに存在していた。マルシャイ

---

87) ebenda, S. 19.

88) Linhardt, H.: Angriff und Abwehr im Kampf um die Betriebswirtschaftslehre, Berlin 1963, S. 241.

89) Marscheider, D.: a. a. O., S. 19.

90) ebenda, S. 223.

91) ebenda, S. 33.

92) ebenda, S. 29.

ダーが実際に問題にしているのはこのうち、後者のみ、具体的には1860年代のエミングハウスの著者『一般工業学』とリンドブルムの著書『商業経営学』のみである。ザイフェルトらが解明したように、これらの著書には、20世紀の経営経済学の先駆的なものが含まれていた。ところが、ウェーバーやザイフェルトらはこれらの著書と20世紀の文献との連なりを考察することなく、19世紀と20世紀とを分断してしまったのである。マルシャイダーは、ウェーバーやザイフェルトらとは全く異なる視点を提供している。マルシャイダーは、1860年代のエミングハウスとリンドブルムの著書が、「今日の意味における経営経済学の著作の発展に対する開始を示している」<sup>93)</sup>こと、「経営経済学の歴史における転換期を示している」<sup>94)</sup>ことを主張する。この理解に基づき、マルシャイダーは、学説史叙述の出発点を1860年代末、具体的には1868年に置く。そして1868年から1914年までの文献を、従来の学説史書におけるとは比較にならないほど詳細に研究しているのである。

すでに、イザーク (Isaac, A.) は20世紀初頭の状況を、「当然のことながら、存在するもののみを基礎とすることが可能であった。しかも人は概して、次の著書、すなわちリンドブルムの『商業経営学』とエミングハウスの『一般工業学』を基礎とした」<sup>95)</sup>と述べ、シェーンプルーグ (Schönpflug, F) は、「……現代の発展は、この最も遠い分枝において前世紀の60年代にまでさかのぼる」<sup>96)</sup>と述べていた。マルシャイダーは、19世紀と20世紀の連続という視点から首尾一貫して学説史を描こうとするのである。

マルシャイダーは、既述したエミングハウスおよびリンドブルムの著書を取り扱った後、ハウスホーファー (Haushofer, M.) の次の著書を取り扱

93) ebenda, S. 19.

94) ebenda, S. 48.

95) Isaac, A.: Die Entwicklung der wissenschaftlichen Betriebswirtschaftslehre in Deutschland seit 1898, Berlin 1923, S. 44.

96) Schönpflug, F.: Betriebswirtschaftslehre, 2. Aufl., Stuttgart 1954, S. 16. 大橋昭一, 奥田幸助 (訳), 『経営経済学』, 有斐閣, 昭和45年。

っている。

Haushofer, M.: Der Industrie-Betrieb, München 1874.

マルシャイダーによると、ハウスホーファーのこの著書『工業経営』は、「エミングハウスの輝かしい業績を範とする」<sup>97)</sup>ものである。エミングハウスの業績は当時においても決して孤立してはいなかったのである。19世紀の文献については、「未知の経営経済学的著作の山」<sup>98)</sup>がまだまだ埋もれていると考えなければならないであろう。

## V 総括と展望

以上、ウェーバーによる19世紀の文献を対象とする学説史の研究をたずね、そしてウェーバー以降の研究史の動向を、かれの研究成果を継承するものとこれを批判するものとに2分して整理した。これらを簡単に総括しておこう。

ウェーバーおよびかれの後継者たちによって、次の2点が解明されている。

1) かれらは、「暗黒の19世紀」像を例証するものとみなした19世紀的商業学の大量の文献群の存在とともに、これとは厳密に区別されるべき別の潮流の存在を指摘した。これにより、19世紀が単一の潮流のみから成る時代ではなかったことが明らかにされたのである。

2) かれらは、19世紀の卓越せる文献を掘り起こし、これを経営経済学の先駆者として称揚し、そして19世紀の文献と20世紀の経営経済学の著作との間の照応を確認した。これにより、1920年頃に形成された経営経済学と類似のものがすでに19世紀において存在していたことが明らかにされたのである。

ウェーバーおよびかれの後継者たちの研究は、次の2点の欠陥を有している。

1) かれらは、19世紀の諸潮流のうち、一方では、19世紀的商業学の潮流が

97) Marscheider, D.: a. a. O., S. 108.

98) Linhardt, H.: a. a. O., S. 241.

他に優越すると解釈し、他方では、経営経済学の先駆者たる文献の存在を知りながらも、これを当時としては異常なもの、あるいは例外的なものであるにすぎないと解釈して、結局、19世紀を暗黒の時代として一括的に評価してしまった。19世紀の文献を対象とする学説史の研究としては、これは、あまりにも大雑把であろう。

2) かれらは、19世紀においてすでに存在していた経営経済学の先駆者と20世紀の経営経済学とを人為的に別々の時代に属せしめ、両者の連続の面を見落としてしまった。20世紀の経営経済学は、1898年以降において、あるいは1920年頃において突如として形成されたものではなくて、さまざまな点において19世紀の文献に深く根をおろしているものであり、この両者をひと続きのものとして一貫して把えることが要求されるのである。

筆者がウェーバーおよびかれの後継者たちの研究の欠陥とみなした2つの項目に対立する意見が、ウェーバーの研究成果を批判する人々によって提出されている。後者の人々の意見は、次のように総括される。

1) かれらは、工業経営を対象とする卓越せる文献、あるいは経営経済学の先駆者たる文献こそが19世紀の状況を代表するものであるという新しい解釈を提出した。この文献はウェーバー以来、19世紀としては異常なもの、あるいは例外的なものであると解釈されてきた文献であり、そして「暗黒の19世紀」像を例証するものとされた19世紀的商業学の大量の文献群に圧倒されて、学説史の叙述において周辺へと押しやられていた文献である。

2) かれらのうちのある者は、経営経済学の先駆者たる文献が群をなして現われた1860年代をもって、経営経済学の歴史における大きな転換期とみなし、ここに経営経済学の源流を探った。これにより、ウェーバー以来の一括的な評価と時代区分の学説が見落としていた、19世紀（特にその60年代）と20世紀との連続という解釈が提出されたのである。

ウェーバーの研究成果を批判する人々の研究は、次のような欠陥を有して

いる。

1) かれらは、ウェーバー以来「暗黒の19世紀」像を例証するものとされてきた19世紀的商業学の大量の文献群を、学説史の研究対象から追放してしまい、そして経営経済学の先駆者たるエミングハウスらの著作のみを取り扱った。19世紀の文献を対象とする学説史の研究としては、これは、片手落ちであろう。学説史上、19世紀という時代は、一方では、19世紀的商業学の伝統が創造され、そして栄え、やがて崩壊していくとともに、他方では、この潮流に対立して、1920年頃に完成を見ることになる経営経済学が漸く芽生えてくる時代であり、この2つの潮流の動態を的確に把えることが要求されるのである。

さて、従来の研究動向に対する以上のような総括を踏まえ、さらに私自身のささやかな原典研究をも踏まえ、私の19世紀像を素描してみよう。

叙述の出発点は、1800年前後の時期におかれる。この頃、ビュッシュが活発な著作活動をおこない、かれの著作はその後の同一領域の著作に大きな影響を与えることになった。筆者がビュッシュの業績に注目するのは、これによって刺激を与えられ、これに準拠しようとする人々が続出したからであって、ビュッシュとかれの業績はいわば1つの社会現象としてわれわれの関心をひくのである。ビュッシュの著作に源を発する大量の文献、すなわち19世紀的商業学の大量の文献群の存在が19世紀を通じて確認されている。ビュッシュによって著作の一定の型が創造されたと解することができるのである。科学史家クーン (Kuhn, T. S.) は、「一般に認められた科学的業績で、一時期の間、専門家に対して問い方や答え方のモデルを与えるもの」,<sup>99)</sup>「後に続く研究者の世代にとって、その研究者の正当な問題と方法を定める役割を

---

99) Kuhn, T. S.: The structure of scientific revolutions, 2. ed., Chicago 1970, p. viii. 中山茂 (訳), 『科学革命の構造』, みすず書房, 1971年, まえがき, Vページ。クーンの考え方は、科学者集団の社会学に属するものである。

する」<sup>100)</sup>ものを、パラダイム (paradigm) と呼んでいる。このパラダイムに類するものがビュッシュによって創造されたと解することができるのである。これを、19世紀的商業学のパラダイムと呼ぶことにしよう。

19世紀的商業学のパラダイムは研究の対象として、商業、すなわち「われわれ自身にとっては無くてもすむ自然産品または人工の製品、あるいは両者を買入れ、そして利益を得て、場合によっては損失を蒙って、他人に再び譲渡する」<sup>101)</sup>行為に考察を（意識してか無意識のうちに、とにかく）限定する。商業の目的については、「利益の意図と期待があらゆる商業の基礎に存在しなければならない」<sup>102)</sup>とされるが、そこにおける利益概念は極めて漠然としたままにとどまっている。商業学の内容としては、貨幣および物の貨幣価値についての知識、商品についての知識（度量衡など）、商業を営む種々の形態についての知識、商業政策（関税政策など）についての知識、要するに商人の目的にとって役立つ雑多な知識が含まれているのである。

ビュッシュの著作に、19世紀的商業学の大量の文献群が続く。これは、クーンがいう通常科学的な展開の様相を示している。クーンは、「パラダイムとして受け入れたものの上に立った」<sup>103)</sup>研究、「特定の科学者集団が一定期間、一定の過去の科学的業績を受け入れ、これを基礎として進行させる研究」<sup>104)</sup>を、通常科学 (normal science) と呼んでいる。アドラー、ブレンターノ、フィンダイゼンらの著書は、ビュッシュによって与えられたパラダイムに基づく通常科学的な展開の様相を示すものである。「商業の経営に関連す

100) *ibid.*, p. 10. 前掲邦訳, 12ページ。

101) Büsch, J. G.: *Theoretisch-praktische Darstellung der Handlung in ihren mannichfaltigen Geschäften*, Hamburg 1824, S. 3.

この著書の初版は1792年に出版されているが、本稿では、1824年に出版されたビュッシュの全集が用いられている。

102) *ebenda*.

103) Kuhn, T. S.: *op. cit.*, p. 23. 前掲邦訳, 26ページ。

104) *ibid.*, p. 10. 前掲邦訳, 12ページ。

るあらゆる知識の系統的に並べられた総体」<sup>105)</sup>を提示したアドラーの次のような言葉は、19世紀的商業学の特質をよく表現している。『科学』という概念はここにおいては、もちろん最も厳密な意味には解されない。われわれは、それ自体でまとまりのある、厳格に区画された科学を問題にしているのではなくて、目的に関連してのみ統一体とみなされうる、多くの知識領域の寄せ集めを問題にしている。それゆえに Handelswissenschaften という複数の表現が、上記の意味における概念によりよく適合している」。<sup>106)</sup>

19世紀的商業学の潮流は、20世紀にまで及んでいる。ケッセラー (Kesseler, W.) の次の著書を参照されたい。

Kesseler, W.: Moderne Handelsbetriebslehre, Stuttgart 1905.

ケッセラーのこの著書の表題を『現代商業経営学』と呼ぶことにする。

1860年代に至り、19世紀的商業学の伝統は、激しい批判にさらされる。批判の担い手は、リンドヴルムとエミングハウスである。かれらはともに、19世紀的商業学の「非科学性」を批判した。そして19世紀的商業学の伝統と対決する新しい業績を提示した。この時から、19世紀的商業学のパラダイムは色あせていき、やがて他のものと完全に交代することになるのである。

リンドヴルムは、「商業学は、この表題を持った多くの著書の出版にもかかわらず、ビュッシュの頃以降、ほとんど進歩しなかった。本来的に科学的なるもの、つまり経営学に関してはむしろ後退したのである」<sup>107)</sup>と、19世紀的商業学を批判し、そして「商業経営がいかにして科学的に教授されるかに関する研究を、自らの力で試みることを決意した」<sup>108)</sup>のである。商業学の科学化という試みに対して、リンドヴルムは、国民経済学と総称されていた既

---

105) Adler, A.: Leitfaden für den Unterricht in der Handelswissenschaft, 3. Aufl., Leipzig 1892, Vorrede zur dritten Auflage.

106) ebenda.

107) Lindwurm, A.: Die Handelsbetriebslehre und die Entwicklung des Welthandels, Stuttgart und Leipzig 1869, S. VI.

108) ebenda, S. V.

存の科学の内容を吟味し、この科学全体から部分素材を切り離し、これを私経済学と呼ぶ1つの学科目にまとめ上げるべきことを提案する。そしてこの基礎の上に、商業経営学の体系化を企てるのである。リンドブルムの努力は1869年の著書『商業経営学』に結実する。この著書において、リンドブルムは、国民経済の枠内における商業の位置を説明し、商業の利益が生じる根拠を説明し、そしてドゥーゼムントが指摘したように、利益概念の吟味に基づいて「全体」への奉仕という思考を提出したのである。

リンドブルムとほぼ同じ頃、エミングハウスも、「いわゆる商業学においては、一般経済学の抜萃から成る精神なき寄せ集めが提供される」<sup>109)</sup>と、19世紀的商業学を批判した。「科学的な基礎づけという点によって、……以前の時代の処方書（19世紀的商業学の文献のこと……私注）から区別される」<sup>110)</sup>と自負するエミングハウスの代表作は、1868年の著書『一般工業学』である。この著書において、エミングハウスは、国民経済学と総称されていた科学を一般経済学と私経済学という2つの領域に区分し、後者を緊急に整備すべきことを提案する。エミングハウスの私経済学は、一般農業学、一般工業学、一般商業学などと呼ばれる諸部分から構成される。上記の著書において、エミングハウスは、19世紀的商業学が本格的には考察の対象としなかった工業経営を取り扱い、これを一般工業学という名称のもとに体系化した。そしてドゥーゼムントが指摘したように、そこにおいて「工業労働」について注目すべき思考を提出したのである。

ここに概観したように、リンドブルムおよびエミングハウスの業績は、19世紀的商業学に対する批判としての側面を有しており、これに対決して提示されたものとみなされることが可能である。しかしながら、かれらの業績がただそれだけのものであったならば、決して学説史研究者の関心をひくものではないであろう。学説史におけるかれらの役割は、かれらの業績に注目し、

109) Emminghaus, A.: Allgemeine Gewerkslehre, Berlin 1868, S. V.

110) ebenda, S. 9.



これに準拠しようとする人々が続いたからであって、かれらとその業績は社会現象としてわれわれの関心をひくのである。

リンドヴルムおよびエミングハウスの業績は、19世紀的商業学の伝統に対立する新しいパラダイム候補とみなされることが可能である。このパラダイム候補を、続く世代に属する人々、すなわちシェーア、ハウスホーファー、ディートリッヒらは、改良し、その可能性を開発していったのである。たとえば、従来、シェーアの学説の斬新さが強調されてきたが、シェーアの学説の重要な部分はすでにリンドヴルムの著書の中に見出されるのであり、しかもシェーアは「利用可能な基礎」<sup>111)</sup>を求めて、リンドヴルムの著書を読んでいる。シェーアは20世紀の諸状況の中において、1860年代のリンドヴルムの業績と格闘しつつ、これの換骨奪胎を通じて独特の思想を作り上げたのである。

1つのパラダイムから他のパラダイムへの交代、クーンはこれを、科学革命 (scientific revolution) と呼んでいる。19世紀的商業学のパラダイムから新しいパラダイムへの交代が完了するのは、われわれが問題にしている科学革命が決着を見るのは、1920年頃のことである。これはいうまでもなく、経営経済学が形成されたといわれている時期である。経営経済学の形成に実際に参加したテンドゥリー (Töndury, H.) の次のような言葉は、経営経済学の形成を19世紀的商業学からのパラダイムの交代として描くことの妥当性を十分に説明している。「初期における経営経済学の全発展は、商業学との絶縁のみであり、……絶えざる反乱とその成功であった。そして以前の時代における商業学の領域の業績が何らかの方法で大きな力を揮っているという最少の徴候さえも、どこにも存在しない。両者の間の裂孔は周知のところである」。<sup>112)</sup>

最後に、私の叙述様式が被っている制約を述べておきたい。それは、19世

111) Schär, J. F.: Allgemeine Handelsbetriebslehre, Leipzig 1911, S. IV.

112) Töndury, H.: Wesen und Aufgabe der modernen Betriebswirtschaftslehre, Bern 1933, S. 36.

紀においても未だ存在していた、18世紀における商業学の古典を継承する文献が取り扱われていないことである。この文献は、一方において、ロイクスやルドヴィチらの18世紀における商業学の古典との関係において、他方においてビュッシュに始まる19世紀的商業学との関係において、この2つの関係においてのみ取り扱われるべきものである。従来の研究においては、これらの関係は十分に解明されているとはいえない。やがて研究が進み、多くのことが解明されることであろう。